



通信

No. 56

2015年 秋号

発行：子育てサポートくるみ

羽曳野市壺井508-1

TEL 072-957-3282

FAX 072-958-4089

<http://kosodate-kurumi.com>

平和への思いを新たに

2年に一度、学童児5・6年生をつれて、沖縄平和学習の旅を続けて25年以上がたちます。今年は、5・6年生6名と保護者4名と一緒に旅をしました。この旅は姉妹園3園（もみの木保育園：岡山、遊びの家保育園：長崎）と交流し学ぶものです。学童の子どもたちにとって、沖縄平和学習は心まちにしている取り組みです。沖縄の文化にふれ（エイサーや食文化）、自然を体験し（美しい青い海での体験）、そして平和について一緒に考えます。

今年は戦後70年目、未来を思う年に沖縄に行けたことは、とても意味があると思います。1945年3月末に沖縄への地上戦がはじまりました。県民の4人に1人がまきこまれ、正規軍人をはるかに上回る住民が犠牲となりました。沖縄戦では、自然の洞窟（ガマ＝壕）が避難場所でしたが、そこでもたくさん悲惨なことがありました。見学したチビチリガマでは、集団自決が行われ、慰霊碑にきざまれた方の年齢を見ると15歳以下の子どもが多く、自分たちと近い年齢に、子どもたちはしばし碑を見つめていました。70年前に起こったことです。そして、現在の沖縄は県土面積の10.2%が米軍基地となっています。基地と隣接する小学校の問題や起きている事故の話や戦闘機の音がする中、基地を目の当たりにして説明を聞きました。そして、美しく青い海、たくさんの魚が泳ぎ、サンゴが豊かに生息している海に基地が建とうとしている現実を見てきました。



[沖縄平和学習より：シーサーとハイビスカス]

70年前の戦争後、私たちは憲法9条により、二度と戦争をしない国として歩んできました。今、国際社会も変化し、憲法改正が議論されています。未来を担う子どもたちに戦争を体験させないために、大人として、沖縄で見て聞いて学んだことをもとに考え、行動していくことが大事だという思いを持って帰ってきました。子どもたちが安心して生きるために、平和は絶対に不可欠です。子どもたちには「生きる」ために学び、協力しあうことを伝える子育てを親とともに作りたいと思っています。

くるみ保育園 園長 山田房江

保護者の声

○ 沖縄平和学習の感想（くるみ学童6年生保護者 増田貴之）

2日間の平和学習でいろいろな所を見学に行きました。

その中で、米軍基地に行った時にびっくりした事は、住宅、学校、病院、保育園等、町の真横に基地がある事、頻繁に飛ぶ戦闘機の数が多い事、そしてその騒音の大きさは、想像以上で、ガイドさんの説明のなかで、戦闘機が飛ぶたびに、学校の授業が中断することになったり、その騒音が大きいので、町の人話し声も大きくなってしまおうという事が分かりました。それぐらいの大きい騒音でした。沖縄の人々は本当によく我慢して生活しているなと思いました。

あれを見ると70年前に戦争は終わったとなっていますが、未だに終わっていないような気持ちになりました。

○ 沖縄の平和学習に参加して（くるみ学童5年生保護者 前田伸幸）

5人の子供の末っ子という事で最後に参加しておこうと思い沖縄に行きました。台風が近づいていたにもかかわらず、天気は良く日程もそれなりに消化できて良かったです。沖縄の地上戦や米軍基地に関して教科書や新聞等でなんとなく知っていましたが、いや実際には知っていると思っていただけで、自分の目で見て耳で聞いて初めて沖縄の苦しみがありました。

ガマ(防空ごうの様なかくれ家)の中はむし暑く、懐中電灯を消すと真の闇で20秒程で息苦しくなり恐怖を憶えました。ここに何日もかかっていたとは想像を絶します。ひめゆりの塔に関しては女学生の美談の様に思っていましたが、実際資料館の展示を見ていますと吐き気をもよおす程凄惨なものでした。

又米軍基地については、ジェット戦闘機やヘリコプターの爆音でまわりの音や声が聞こえません。それがひっきりなしです。まともに授業が受けれる状態ではないし、いつ墜落するかわからない状況で暮らしている住民の苦しみは相当なものでしょう。

こういった状況は新聞やTVではわかりません。自分の目で見て耳で聞いて初めて沖縄の現実がわかります。

沖縄は単なるリゾート地ではない。まだ戦争の傷をひきずっているとつくづく思いました。この状況をこれからも伝えていかなくてはと思います。安保法案は何が何でも廃案にしなければ、歴史は又くり返される。これが今回の沖縄の感想です。



[沖縄平和学習より：碑の前で説明を受ける様子]

斎藤先生の語り聞かせ

“さくら・さくらんぼ保育”の創設者である斎藤公子氏。その斎藤先生は絵本も作られています。第一作は「サルタン王ものがたり」です。斎藤先生はどんな願いで絵本の仕事に取り組まれたのか。“全集3”の中でこのように語られています。『母が大正デモクラシー期、大正新教育の頃の小学校の先生だったんです。その時、父母がすぐれた絵本を子どもに与え、私は小学校四年まで虚弱だったので、母が、文字の習得より山であそばせ、ずっとお話をしてくれたんです。それがもとで私は本が好きになり、一冊の本を何回も読んだんです。それを中学生くらいまで続けて、その他に世界文学文集とか日本の近代文学とか、読まないものはないくらい読んで。そうしているうちに、だんだん選ぶ力が与えられてきたんです。最初は母が選んだんですが、いい話だと何回も私が要求するわけで、それが私の生き方を決める一つになってもあるんだと思いますね。こういう人間になりたいと。だから、子どもの心にずっと残って、いざ自分の生き方を決めようという時に、こう生きようと自分で決めるための糧になるものをつくりたくて。』とあります。

年長の後半、いよいよ卒園という時、子ども達が、絵本の主人公にあこがれて、あんな人間になりたい！あんな勇気を、弱い者を助ける勇気を持った人間になりたい！と感じる物語や民話の語り聞かせをします。卒園していく年長児たちがこの先困難にあった時、心の片隅に残って力になるように…という思いも抱きながら。大人も引き込まれる物語です。

斎藤先生から直に講座を受けたり、読み聞かせを聞いたり、さらに埼玉県・さくらんぼ保育園にくるみの年長児を連れて合宿した経験を持つ職員は5名、現在いる職員の半数以下になります。今回は当時の「斎藤先生の語り聞かせ」について4名の職員から書いてもらうことにしました。

(斎藤公子の保育絵本)

- ◇ 「サルタン王ものがたり」 1985・青木書店
- ◇ 「錦のなかの仙女」・1985・青木書店
- ◇ 「黄金のかもしか」・1985・青木書店
- ◇ 「森は生きている」・1986・創風社
- ◇ 「わらしべ王子」・1990・創風社
- ◇ 「青がえるの騎手」・1990・創風社
- ◇ 「金のにわとり」・1990・創風社
- ◇ 「つばめがはこんだ南のたね」・1992・創風社
- ◇ 「森の中の三人の小人」・1994・創風社
- ◇ 「泥沼の王の娘」・1995・創風社

(タイトル・出版年・出版社)



[サルタン王ものがたりより]

○ 木内 忍

私が初めて斎藤先生の語りを聞いたのは、くるみを知って間もない頃(もう30年くらい前)です。当時くるみでは、“斎藤公子の保育講座”を開催するにあたり、小学校の体育館を会場に借り、くるみの職員・親はもちろん、地域の保育者・親たちとも一緒に学ぶ機会が多くありました。

‘さくら・さくらんぼ’も‘斎藤先生’も知らなかった私が、何か直感でこの講座を受けたくなり、バイクで2日間古市小学校へ行きました。斎藤先生のお話はもちろん、リズムも初めてで、訳がわからないまま、カルチャーショックの様な感覚で講座を受けたのを今でも憶えています。ビデオ“さくらんぼ坊や part5”が完成直後で、その上映があり、出版直後の絵本「錦のなかの仙女」の語りもあった講座でした。

その語りは一言で言えばショックでした。子どもの頃から、テレビっ子(と言っても小学校4年生頃からしかテレビはなかったのですが)で育った私にとって、絵本の語り聞かせというものが初めてで、かぶりついて先生の語りを聞いていました。□□(主人公の名前)の母への思い、どんな困難な事にも立ち向かう姿、その豊かな田園風景等々、絵本の挿絵でなく、語りからその情景が頭の中に次々現れてきて、気がつくとも涙が出ていました。

また別の保育講座では、くるみの年長の子ども達に「森は生きている」の語りを特別にしてもらったこともありました。その時の年長は、今、親である宇山純平君を含む6人の子どもたちです。その日は雪が降るとても寒い日で、古市小学校の暖房もない体育館の中、少しでも寒くないようにとひいたマットに正座をして、年長さん達は、先生の語りを聞いていました。2時間という長い語りの中、どの子も微動だにせず、目を輝かせ、食い入るように聞いていてこの子達の姿に、私は先生の語り以上に感動したのでした。

卒園期を迎える子ども達に語り聞かせている絵本の主人公は、けなげで素晴らしい生き方をするストーリーが描かれていることが多いです。また、斎藤先生の語りの深さは、幼少期からの自身の生き様や、経験があるからこそ、誰が読むより、相手に伝わってくるのだと思いました。斎藤先生が、『ありとあらゆる文学本を読みなさい。』とよくおっしゃられていました。自分自身、本を読むのは苦手ですが、その頃斎藤先生に勧められた色々な文学本だけは買い揃えています。まだ読んでいないのもたくさんありますが、少しずつ読んでいき、自分自身を深めていきたいと思います。



【錦のなかの仙女より】

○ 山森 美会子

私が初めて斉藤先生の語り聞かせに触れたのは、くるみに勤め始めてすぐの保育講座でした。学生時代、保育の勉強をしていなかった私は斉藤先生の事は何も知らずくるみに勤め、リズムあそびを知り、絵本についても一般のものぐらいしか知らなかったので、斉藤先生の絵本の語り聞かせを聞いた時には本当に驚きました。絵本や語りは、子どもが聞くものだと思っていた私は、本当に衝撃的で始まると同時にどんどん引き込まれていったのを覚えています。

今の園舎に移転してからは、斉藤先生の合宿保育がくるみを会場として、毎年あり、その度に絵本の語り聞かせがありました。合宿に参加するたくさんの年長さんが目を輝かせて聞いていたのを思い出します。

その中で私が一番印象に残っているのは、「わらしべ王子」の語り聞かせです。斉藤先生の語りと山田健さん（オペラ歌手）のうた、名川太郎さんがピアノを弾いて下さり、絵本の世界に引き込まれていきました。斉藤先生の語りを聞いているとその情景が目に見えかなくて終わった時には、本当に感動しました。

合宿では、接待係として斎藤先生に接する機会がありました。休憩室で休んでおられる先生の姿は、時にはとてもつらそう（お年でもあり、合宿のお疲れも見られ）にされているのですが、子どもたちの前に立って語られている先生の姿は疲れなど微塵も見せず凜とされていて、そんな先生に少しだけでも触れた事は私にとってはとても貴重な時間だったと思います。

○ 紅露 とも子

斎藤先生に初めてお会いしたのは、くるみに就職してすぐの保育講座です。話されている内容も理解できませんでしたが、真ん中の席で必死になって、聞いていたことを憶えています。年長児（5～6才）のリズムは、手先・足先・目の動きまで舞踊として指導されていました。そして語りでは、深い意味があり、どの話も人間として生きていく為に大事にしてほしい願いが込められています。人間の細胞は7年かかって入れ変わり、身体も心も成長し、6歳の年齢は、脳の発達が大人により近づく時期で、だからこそ見たこと・感じたことをより吸収できる時に本物を・・・と厳選しておられました。

その中でも私が印象的な物語は「錦のなかの仙女」です。本を片手に持ちながらも目は子ども達、語りを聞く人を見て話しておられました。くわしい内容に関しては是非、本を手にとってもらえたらと思います。貧乏な家庭で暮らす、母と男の子3人。母は、錦を織って生計を立てていましたが、その母が夢に描く世界を錦に織り込む、目から血が落ち、その赤い血を陽の光に織り上げる。私もその頃は、子育て・生活を回すだけで精一杯でしたが、親(人間)として夢や希望を持って生きていくことを言われているように思いました。そしてその錦が風で空高く舞って行ってしまった時…その時のとても悲しく寂しい曲と歌声の一体化・・・自分が絵本の場面の中にいるようでした。その母の思い(夢と希望)を取り戻

す為に困難を乗り越える末の息子、口口の姿。最後に錦をさがし持ち帰り母に手渡し、夢が叶い見えなくなった目が開かれる母の喜び、私自身も希望をもらったお話でした。心に残る絵本です。

○ 宮岡 都

子どもたちへの語り聞かせはもちろん、大人に向けての語りもありました。特に印象的だったのは、ギリシャ神話。時代背景・登場する人物について話していただき、わかりやすく感動したこと覚えています。斎藤先生に会わなければ、ギリシャ神話を読むことはなかったと思います。

「縛られたプロメテウス」

絶対の権力を信じていた“ゼウスの神”に人間に火を与えた罪で高い崖に手足を鎖で縛りつけられ、永遠に死ぬ事の出来ないという最も残酷な刑罰をうけているプロメテウス。ゼウスの妻、ヘラの嫉妬によって牛にされ、耳の中にアブを入れられ気の狂う程の苦しみを受けてのがれてきた女に、プロメテウスは「死にたくても死ねない自分を見よ、ゼウスはいつか滅びる」と希望を捨てず、前をみて生き続ける姿、必ず歴史は動くことを確信し感動しました。

私たちは保育を通じて子どもたちに何を伝えていくのか、自分たちが知らないとただ読み聞かせるだけ、ただ歌うだけ、になってしまう物でも自分が何を伝えたいのかをはっきり持つことで変わってくると思います。

他にも「アーサー王物語」「ニーベルンゲンの指輪」など自分では読まなかつたろう本も読み進める事が出来ました。

「プロメテウスの火」朗読

人間に火がわたされた 人間の歴史がはじまった
人間は 火で物をやいてたべ 寒さをふせぎ
人間は 火でものをつくった
人間は 火によって 文化や文明を生み出した
ついに 人間は 月の世界にその足で立った
また 人間は 人間の体や心をも焼きつくす 原爆を作り出した
人間が 火を正しく使うことで人類の文化は栄える
火は 民衆の労働の手によって いっそう輝かしく燃え立つ
その火を 高くかけよ



卒園式の時、卒園証書を誇らしく掲げて歩く子どもたち。まっすぐ前をみて生きて、歩み続けてほしいと願い歌っています。